
Grim Reaper

羽柴 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G r i m R e a p e r

【Nコード】

N 9 2 7 7 S

【作者名】

羽柴 暁

【あらすじ】

謎の童顔少年？歌島春と国家軍特殊部隊『梧』として冷酷に生きる水原雪とその他大勢が繰り広げるBL風味ファンタジー的物語！

プロローグ (前書き)

これはプロローグとして読んで頂きたい。宜しく願います。

プロローグ

空は晴れ渡っていた。カフェのオープンテラスは昼時ということもあり、ここそこそ多くの人で賑わっている。

歌島春（うたじまはる）はテラスの白い椅子をあともう僅かで倒れるという位置まで傾け、上着のポケットの中で230円を握っていた。何を隠そうこれが全財産だ。そして今さっき、1杯210円のカフェオレを注文してしまった。

「此処でアルバイトできるかなあ……」

実年齢よりも非常に若く見える春の顔だと身分証明書でも無ければ無理だとわかっていた。思わずこぼれる独り言が懐の空しさをよりにっそう際立たせる。さらにカフェの中の楽しそうな談笑や街の騒音でさえも、春の空しさを強めていった。

白いエプロンを腰に着けたギヤルソンが右手の銀のプレートにカフェオレを乗せて近付いて来た。これで全財産は20円になる。ポケットから手探りで210円を取り出そうとしついでにギヤルソンはカフェオレをテーブルの上に置いた。

その瞬間、春の左頬を何かが掠めた。頬から血が滴る。刹那、ギヤルソンの首が血飛沫を上げ鈍い音を立てて地に落ちた。残った体はゆっくりと振り子のように揺れながら倒れた。血飛沫は雨のように周囲を濡らし、悲鳴を集めた。春とギヤルソンの延長にある木には血の着いたサバイバルナイフが刺さっている。

春は大量の血が入ったカフェオレを見つめ、ポケットの中の210円から手を離れた。

今度はカフェ店内から悲鳴と物を薙ぎ倒す激しい音が聞こえた。その悲鳴は断末魔のようで、声は間もなく途絶えた。

血の伝う頬の痛みなど忘れ、逃げるといふ常識も吹き飛び（単に腰を抜かしたただけだが）、呆然と簡易版地獄絵図と化した店内の光景を眺めていた。

カフェの周囲はどこか一線、絶対安全であろう範囲に野次馬が僅かに集まっている。普通こういう時にはもっと多いだろ！と心の中でつつこむが、この状況はあまりにも危険すぎる。何せ近付けば命の保証は無い。

店内ではスキンヘッドに血管が浮き上がった筋肉質の大男が手につく物を所構わず投げていた。

目が合ってしまった…

大男の周りには死体と思わしき者が在るだけで、店の敷地内で生きているのは春だけだった。大男は大きく振りかぶり、白い椅子を春に向かって投げつけた。

「うわあああ！」

春は情けない悲鳴を上げ、とっさに避けることなど出来ず、ただその場で身を竦めた。

絶対当たる……

椅子は激しく音を立て地面を転がった。有る筈であった衝撃と痛みは無く、不思議な事に春の体は地に着いてはいなかった。

温かい感触が全身を包んだ。柔らかいとは言いがたいが、春は見知らぬ女性であろう人物に抱き抱えられていた。その人は整った顔立ちで長い前髪には黒地に白い小花柄のピンがついている。

その人は春の上半身に片腕を添え、しゃがんだ状態で腰に着けたポーチから小さなナイフを取り出し、大男のこめかみへ放った。ナイフは正確に大男に刺さっていたが、大男は倒れずふらつく足で春達に近付いた。

「あう……」

目の前のグロテスクな光景とすぐ其処に在る死への恐怖が入り混じり、嗚咽となって春の口からこぼれる。

「しぶといな。」

女性にしては低く冷酷さの染み出た冷たく凍るような、暗い闇のような、重く沈むような声でした。

そしてもう一本、今度は大振りのナイフを取り出し数メートルの

所まで近付いて来た大男の首筋を斬った。血飛沫が勢いよく飛び上がる。大男は完全に息絶え、地に倒れた。

二人の服は赤く染まっていた。春は自ら立ち上がるうとし、女性はそのまま手を離れた。しかしまだ、春の腰の抜けは治っておらず、よろめいた末、女性の方へ向け倒れた。

(ラッキー)

なんて思える。あれだけの惨劇を見ながら以外と余裕なものだ。腰は抜けているのに…

ゴッ…

あれ……？

頭の中では温かく柔らかい感触が待っている筈だった。けれど、まるで胸板のような硬いものが春の頭にぶつかった。まるで男の胸板…

まさに男の胸板だった。そう男だ。

ふと、助けられた瞬間のお姫さま抱っこが脳裏をよぎった。

男の癖に花柄のピン何かつけやがって…。そんな八つ当たりを思いながら春の意識は途絶えた。

プロローグ (後書き)

何かなんだか：だったとは思いますが、続きを早いとこ書きますのでご容赦下さい。読んで頂き有り難うございました。

縁（前書き）

意識を失くした春の目覚めた場所は

此処から物語は動き出す

縁

「うわっ！」

春は思わず叫び、ベッドから飛び起きた。この叫びは男にお姫さま抱っこをされたショックによるものだ。

しかし、冷静に辺りを見渡すと此処は血みどろになったカフェでも男の腕の中でもなかった。白い天井、白いカーテン、白いベッド。イメージは保健室。綺麗な女医さんのポジションである灰色のデスクには白衣の………男が座っていた。

素直な感想は………また男かよ。

「気分はどう？痛い所は無い？」

白衣の男は左の前髪が長く完全に左目は隠れていた。でも、何か美形っぽい。質問はいきなりだったが、一応答える。

「………はい………」

「外傷は無かったけど血まみれだったから………その………ね？」

濁された言葉と白衣の男の視線の行き先で自らの格好に気づいた………パンツ一丁。

先程から注がれていた白衣の男の視線は妙なギラギラ感を孕み出していた。背中にぞっとした感覚が走り、とつさに下半身に掛かっていた布団を肩まで被る。「意識戻りましたか？」

どこかで聞いたことのある声が聞こえた。白衣の男が座るデスクの奥の更衣室らしきカーテンの中から、あのお姫さま抱っこをした前髪にピンをつけた男が出てきた。

「ああああ………お………お前っ！」

布団を払いのけ、ベッドの上にたち上がり出てきた男を指さし叫んだ。けれど白衣の男のギラギラ感が増した気がして少し怯む。だがその反応は全く無視されていた。

足音を一切立てず、ピンをつけた男は春に近付き何かを差し出す。不意ながら男と解っているのに………その綺麗な顔立ちにドキっとし

てしまった。

「これ、大きいと思うけど…」

ピンを着けた男は叫びに一切表情を変えることも無く、ワイシャツとズボンを差し出す。サイズは見ただけで大き過ぎると思ったが、贅沢を言える立場では無い事は理解していた。

「…あり…がとう…」

傍から見ても不本意であると分かるような礼を口にすれば、ワイシャツとズボンを受け取る。広げて見れば小柄な春にとってそれはやはり大きくて、二人の視線の中袖を通してみてもそれは変わるわけも無く、裾を踏み袖をだらんと垂らす状態になった。その裾と袖を溜息を吐きながら捲り上げる。

着替えが終わると、先ほどまでギラギラしていた男は打って変わってにこやかで、尚且つまじめな雰囲気醸し出していた。

「名前教えて貰えるかな？」

「貴方たちは誰ですか？」

白衣の男の質問に対し、間を開けずに質問を返す。助けられたという自覚は有り、この言い草はまずいのではないかと思いつながらも訳の分からぬ連中に教える義理は無い。と言う考えが先行した。

白衣の男はニコニコした表情で、それでいて不気味なほど愉快そうに口を開いた。

「国家技術局局长・篠田玲斗。しのだれいとここは軍基地内の生命開発部の治療室だよ。」

白衣の男が言い終えれば、殆ど間を空けずにピンを着けた男も口を開く。

「国家軍特殊部隊『梧』あおきり水原雪。みはらゆき」

そう名乗ったピンを着けた男の声は、機械を思わせるほど冷淡だった。

「さっ、今度はこっちの質問に答えて貰おうか」

そう言う玲斗の表情はニコニコしているのに妙なプレッシャーがあった。重力が心なしが増した様な。蛇に睨まれた蛙にでもなったよ

うな、そんな気分。

「……歌島春……」

警戒心丸出しの春は玲斗の顔を睨み付けていた。一般の医療施設では無く、軍内部の施設に運ばれていたのだ。ただで帰れる気がしない。

「家まで送ろう……」

名前を名乗ってから無言を貫いていた雪が、まるで感情の掴めぬ銀色の瞳でこちらを見据えながらそう言い、車のキーらしきものを手に持っていた。

「家は何処だ」

疑問符すら感じられない平坦な声で雪はそう続けて問い掛けた。

その一言を聞いた瞬間、春の鼓動が強まった。勘づかれてはいけな
いと無意識のうちに思いながらも冷や汗が噴き出す。

「家が…無いんだ……」

鼓動を気取られぬよう、悲しげな表情を作り上げればそれらしく
咳く。そして目に涙を浮かべてみる。

「本当みたいだよ？彼、住民バンクにデータが存在しないから。貧^ス
民街^{ラム}の出か何かかな？」

それは思わぬ助け舟だった。正直、春は自分の使いがどうい
うものかなど知らなかった。気が付いたら街の片隅に居た。ただそれだ
けの認識しか無く、『歌島』という苗字もポスターに書いてあった
名前から拝借しただけで、名前だけは何故かそうであると初めから
認識していた物に過ぎなかった。だからこそ、自分が何ものである
か不安だった。そしてその不安を拭い去れるかもしれないという期
待と、知ることに対する恐怖は、無意味に終わった。そしていつの
間にかパソコンに向かっていた玲斗は、春の方に向き直り、にこや
かに春を見詰め、また口を開く。

「どうでしょうか？何処かの施設に」

そんな気遣いとも思えるような発言は、部屋の扉をノックする音
に遮られた。三人はほぼ一斉に扉の方を見る。間もなく扉が開けば、

眼鏡をかけ、白衣を着た優男風の男が立って居た。

「雪君の家に置いてあげれば良いじゃないですか。」

眼鏡の男はそう言えば部屋の中に入り、柔らかい表情で3人を見る。

「こんな小さな帰る場所も身寄りも無い子に愛を与えようとは思わないのですか？」

眼鏡の男はまるでオペラでも歌っているようなオーバーな言い方きつとちゃっかり廊下で話を聞いていたのだろう。

「それなら佐倉さんの所の方が適当だと思います。それに施設でも変わらないと思います。」

突如、名前を出された雪は眼鏡の男を見ながら動揺したようで、口調を僅かには止めながらそう言い放つ。だが表情に変化は見られなかった。それに対し、佐倉と呼ばれた眼鏡の男はさらりと反論を始める。

「それはダメですよ。私は研究所に入り浸りですから。」

「あのね君たち。」

雪と佐倉の会話の中に割り込み、玲斗は呆れた様に告げた。

「彼を幾つだと思ってるの？推定年齢21歳。施設に入れるのは18歳未満だね。」

室内の空気が止まった気がした。その言葉に呆気にとられた雪と佐倉は同時に春を見た。その背丈はあまりに小さくとも20代には見えないが、問題はそれよりも春の顔の方だった。それはまさに童顔だった。それも10代の前半とも言えるような幼い顔立ちの。そして春はそんな二人の視線から逃れる様にそっぽを向いた。

「バンクに登録もされてないから彼一人じゃ部屋も借りられないからねえ。年齢以前の問題な訳だ。」

玲斗は飄々と言いながら薄ら笑いを浮かべる。これで誰かが引き取るフラグを立てることに成功した。

「だから僕の所においでよ。」

「それは行けませんっ」

へらりとそう続けた玲斗に、突込みのように物凄い勢いで言葉を放ったのは佐倉だった。

「春君、彼の所に行つてはダメですよ、篠田君、貴方もその涎をどうにかしなさい！」

佐倉は諭す様に言葉を続けながら、口端から涎を零している玲斗に軽蔑したような視線を送っていた。当の春と言えば、そんな会話を呆然と眺めて動きを止めている。そして続けざまに佐倉が口を開く。

「雪君の所が良いでしょう。この変態の所では春君の身が危ないですからね。」

佐倉の発言に全員の視線が雪に注がれていた。啞然とする雪に対し、春がじいっと熱い視線を送っている。断ることは許さない。そんな空気に雪は口元を引き攣らせ、他に方法がないかと思案を巡らせるが、良い案は思い付きそうにない。それに少なからず縁ができてしまったと感じていた。

「…わかりました。」少し躊躇ったようにも聞こえるが、雪は冷淡に返事をする。渋々であったのも事実だが、最初から選択肢は無かったように思えて他ならなかった。

縁（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

自己満足な作品ではありますが、やっと二人の物語が始動
さてはて次回はどうなるんでしょうね。

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277s/>

Grim Reaper

2011年12月4日00時50分発行